

詩的アナーキズムと「前衛」に関するノート

——萩原恭次郎、小林多喜二、少しだけブルトン

塚原史

その頃私はアナーキストだった。この選択は一貫して、私自身の信念（確信を持たなかったことがら）に対するひとつの挑戦であり、ひとつの反論であるように思えた。（フィリップ・ソレルス『フランスの狂気』、一九八八年）

A l'époque, j'étais anarchiste : ce choix me parut sur toute la ligne un défi et une réfutation de mes convictions. (Philippe Sollers [1936-], *Les Folies Françaises*, Gallimard, 1988)

1 はじめに

このエッセーで、私が試みようとしているのは《詩的アナーキズムと「前衛」をめぐる、こう言ってよければある種の反時代的思索である。ここで「反時代的」とは、反体制や反権力といったイデオロギー的立場というよりは、『意味のメカニズム』(*The Mechanism of Meaning*, 1978) 序文中の荒川修作とマドリン・ギンズの言葉を借りれば、いつの時代にも支配的な「与えられたもの」(the Given) に対する、さらには私たちの国のこの時代に特徴的な内在化された抑圧的な因襲や秩序に対して、ごく当然のように疑いや憤りを覚える感性と、それらを公然とあるいは

ひそかに表出しようとする知性をとりあえず反映した表現というほどの意味であると言っておこう。

私はこれまで、二〇世紀ヨーロッパを中心に展開されたダダ、未来派、シュルレアリスムなどのアヴァンギャルド芸術運動を考察の対象としてきた。京都とパリの大学院生時代にダダの創始者トリスタン・ツァラ (Tristan Tzara, 1896-1963) の研究を始めてから数えれば半世紀近くの時間が経過したことになるが、その一定の区切りとして、二〇一四年には『模索する美学——アヴァンギャルド社会思想史』を上梓し、『反逆する美学——アヴァンギャルド芸術論』(二〇〇八年)、『切断する美学——アヴァンギャルド芸術思想史』(二〇一三年) とともに「アヴァンギャルド研究三部作」(論創社刊) をひとまず完結させることができた。

したがって、本稿の表題も「∴アヴァンギャルド」としてもよかったのだが、あえて「前衛」と書いたのにはちょっとした理由がある。というのも、原語のフランス語ではどちらも *Avant-garde* だが(英語の *vanguard* の語源でもある)、日本語(というより日本社会への受容過程)の場合には「アヴァンギャルド」は文化・芸術上の突出した傾向を指し、「前衛」のほうはそうした含意を維持しつつ「政治的前衛」をより多く意味してきたからである。つまり、ここで私が問題にしたいのは、政治的社会的運動体としての「前衛」と芸術的アヴァンギャルドの、こういってよければ原理的通底性と本質的隔たりであり、この主題系は「三部作」に続いて執筆を予定している私の著作の方向性を示唆している。

なお、表題を「ノート」としたのは、小論が(狭義の研究論文という意味での)論考ではなくて、私自身の「詩的アナーキズム論」を準備するいわば助走の過程での、文字通りのノート(覚え書)だからであり、ここでは引用の占める割合が圧倒的に多くなるだろうことを最初に予告しておきたい。

2 「内的体験」としての「詩的アナキズム」

ところで、「詩的アナキズム」という（少なくとも私にとってはかなり印象的な）表現は、じつはそれほど一般的ではなさそうだ。私がこの言葉に出会ったのは伊藤新吉（1906-2002）が一九六三年に刊行した著書『逆流の中の歌——詩的アナキズムの回想』（伊藤の本文中では「アナキズム」、なお本稿では「アナキズム」と表記するが、引用中では「アナキズム」も用いる）を通じてなのだが、「詩的」と「アナキズム」との結びつきが、大正昭和期の日本の詩人の研究者で、詩誌『暦程』の編集者としても知られるこの詩人（本人は「三十歳以前に詩作をやめた」と書いている）の独創によるものとは断定できないにしても、その実例がこの書物以外にほとんど見つかからないことは、伊藤に言語表現の先駆者としての位置を約束しているだろう。（外国語でも、たとえばフランス語の場合、*la poétique anarchiste*（アナキズムの詩学）はあっても、*L'Anarchisme poétique* は見当たらない⁽¹⁾。）

そんなわけで、まず最初に伊藤新吉がどのような意味合いで「詩的アナキズム」という新造語を用いたのかを確かめておきたい。伊藤は『逆流の中の歌』の冒頭でこう述べていた。

厳密な意味でアナキズム文学あるいはアナキズムの詩人を語るには、私自身がその思想とその歴史、その運動を的確に理解していなければならない。すくなくともその精神を、誤ちなく身につけていなければならない。だが私はこれらの条件を所有していないし、アナキズムの詩人だというはっきりした自覚をもったこともない。私が体験したことからすれば詩を起点にしている。それゆえ私のこの回想は、純粹な意味でのアナキズムの詩および詩人についてではなく、もっと漠然とした「詩的アナキズム」というべきものを対象にしている。〔…〕

私のいう意味での“詩的アナキズム”を形成した詩人たちの仕事は、それとして「逆流の中の歌」ということができる。私の接触したそれらの詩人たちは、なんらかの叛逆の精神を内包し、自分の置かれている社会や環境、伝統や世俗の秩序、人生の平面からハミ出る姿勢をとっていた。これらの詩人たちはその人格や気質からして、アナキズムを一つの“内的体験”として体験したのである。情操としてのアナキズムということは、それを“内的体験”として体験したことにほかならない。⁽²⁾

ここで「アナキズム」が思想や運動というより、むしろ「叛逆の精神を内包」した「内的体験」(バタイユの著作名と同一だがおそらく関連はなく、伊藤の奥深い言語感覚が察せられる)としてとらえられていることは、私自身の「反時代」的感性と重なるものであり、それは後で少しだけふれるフランスのシュルレアリスト、アンドレ・ブルトンの精神形成過程にも通じるものだと言っよう。

3 萩原恭次郎と『死刑宣告』

先を急ぐと、伊藤新吉は上記「覚え書」で、「詩的アナキズム」の突出した実例として萩原恭次郎(1899-1938)を挙げている。萩原恭次郎は伊藤と同郷(群馬県前橋市)の詩人で(萩原朔太郎とも同郷で名前がよく似ているが、縁戚関係はない)、旧制前橋中学校卒業後一時群馬銀行に勤め、一九二二年に出版社に入社した翌年すでに思想的傾向の強い詩誌『赤と黒』を創刊していた。「覚え書」には「現代詩の形成とその展開に、大きな役割をはたした詩集『死刑宣告』(大正一四・一〇刊)を出してから、萩原恭次郎は急速にアナキズムの方向へ移っていった⁽³⁾」と書かれている、この場合の「アナキズム」はもはや詩人の「内的体験」ではなくて、当時の日本でも最も「前衛」的だっ

た文学運動を指している。この詩集について、伊藤は別の文章でこう述べていた。

〔…〕これらの作品は従来の詩的観念はいうまでもなく、すべての既成の秩序を粉々に打ち砕き、激しい意欲をたたえて憔悴し叫喚し旋転しています。確然とした方向もなく、特定の目的もなく、まっしぐらに何もものにむかって激突する欲情は、それとして詩精神の変革にみちびくものであり、同時に破壊は創造であるという革命の原理を具現しました。

これはひとり『死刑宣告』の詩人〔萩原恭次郎〕だけでなく、『赤と黒』の詩人に共通のことでありました。そしてこれはある場合にはダダイズムの精神に通じ、またある場合にはアナーキズムの意欲に連接したのであって、その狂熱の季節が過ぎるとともに、これらの詩人はそろってアナーキズムの文学運動に参加し、やがてまたその幾人かはコミュニズムの側に移っていったのです。⁽⁴⁾

大正末から昭和初期にかけてダダイスト、アナーキストを自称して個性的な生き方として実践、前述のとおり、一九二三年に前衛詩誌『赤と黒』（「赤」は共産主義者、「黒」は無政府主義者を指す）を創刊した日本近代の稀有なアヴァンギャルド詩人、萩原恭次郎（1899-1938）の生涯と作品についての詳細な考察は別の機会に取っておくが、一九二五年長隆舎から刊行された第一詩集『死刑宣告』が、言語表現ばかりでなく装丁や頁のレイアウトから活字の組み方まで、まさに画期的な作品であり、同時代のヨーロッパ圏のアヴァンギャルド派の詩集（マリネットイ『サン・トゥム・トゥム』、ツアラ『詩篇二五』など）に比肩し得る試みだったことを、あらためて確認しておくかなくてはならない。

もっとも、一九二〇年代の日本にはすでにイタリア未来派、ロシア構成主義、チューリッヒ・ダダなどが紹介されており、萩原自身一九二八年に「約二十年前から今日までの芸術について〔…〕最も急速なる時代意識の先端に立って、好意と悪罵の一斉射撃に面しながら、ともかくやり抜かうとした若き芸術家達の反抗破壊の芸術運動と云へば、立体派、未来派、表現派、ダダ、〔…〕構成派諸派の運動である。これらの運動は猛烈な速度をもって、目ざましくも全世界を吹きまくり、〔…〕勿論、わが国においても若き芸術家たちによって、それらの主義と運動は振りかざされて、推し進められるために戦はれた」(『文章倶楽部』)と書いていたから、『死刑宣告』にもそうした諸派の影響が感じられることは否定できず、萩原の獨創性に関してはある程度の留保が必要かもしれない。⁽⁵⁾

とはいえこの詩集の反響は大きく、萩原恭次郎と同時代を生きたアナキスト詩人秋山清(1904-1988)は、一九七九年に『死刑宣告』出版当時を回想してこう述べていた——「大正十四年秋、萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』が出たときの評判は大したものだった。本が出てから九段画廊で出版記念会があり、それが大荒れだったことも、『死刑宣告』の画期的な性格を反映するものといわれた。詩集をとりまく空気は凄みのある華々しさだったのである」。⁽⁶⁾

本稿の技術的制約からテキスト以外の要素が引用できないのは残念だが、詩集の装丁や活字組を含む全容は一九七一年の初版復刻版や一九八〇年の『萩原恭次郎全集』(第一巻)で知ることができる。⁽⁷⁾

とりいそぎ「序」(復刻版、一〇九頁)から引用すれば、萩原は冒頭に「●私の詩への警告●●／私の詩をデカダンの如く思ふ者、それ自身が一つの嘲笑はるべき近視眼だ！／私は私の詩集に「野獣性なる人間的なる愛の詩集」と名づけたく思ふ程の、いはゆるデカダンを排斥する者である」と書きつけてから、「われわれ自身の「ブルジョワ的(労働者に対する資本家の意味に非ず)サティズム(サディズム)」に警戒せよ！」と続けている。重要

な意思表示なので引用しておこう。

何物かを神聖化してゐねば、安心していられない群羊！〔…〕汝自身を常に不自由に一つの檻をつくって監禁し、汝自身を定形によって住まはせねば安眠出来ぬ神経衰弱者！

詩句を、一行を、散文の如く重荷を背にして疲れしむ勿れ！／次行まで叮嚀に運搬せしむ役を放棄せしめよ！
各行各自に独立せしめよ！ 独特なる哄笑であらしめよ！ また絶叫であらしめよ！ 強き、強き感覚を齎しめよ！

われわれの詩は全部でない！ 一部である。全体は無限である。一部はただ加速度の廻転をつづけるのみだ！〔…〕不完全にのみ永遠の激しき姿はある。ただ怖ろしき鳴動のトンネルをくぐる。破壊と復讐と甦生と一時に発動する中に、われわれの姿は激流を登る！

われは知る！ ここに共通する精神を！ 友を！ 群集を！ 時代を！ ここに知れ！ われらの詩の喧騒を！
泡立ちを！ 立体多層を！ 進みゆくもののみ的一大騒音を！ 非芸術を！（真正なる芸術を！）人間を！

自由！ 自由！ あらゆる奴隷よ去れ！ 汝自身のおこがましくも微弱な良心までも！
(7)

たしかに第一次世界大戦(1914-1918)前後のヨーロッパのアヴァンギャルド諸派(ダダ、未来派、構成主義等)の宣言を思わせる表現であり、詩句を「各行各自に独立せしめよ!」とか、「われわれの詩は一部である。一部はただ加速度の廻転をつづけるのみだ!」あるいは「進みゆくもののみ的一大騒音を!非芸術を!」といった絶叫は、イタリア未来派のマリネッティが「未来派宣言」(1909)や「未来派文学の技術的宣言」(1912)で強調した速度や騒音の美や、因襲的統辞法からの詩の解放と重なっているし、チューリッヒ・ダダのツアラが「ダダ宣言一九一八」で「各頁が爆発しなければならない」と書き、その末尾に「自由」と記したことなどがすぐに思い出される。「未来派宣言」は一九〇九年に森鷗外によって直ちに邦訳され、その後一九二一年に日本未来派が結成されていたから、前述のとおりその影響は確実で、萩原自身一九二八年に「まったく現在においては未来派の自由詩は新しき文学の常識となってしまった」(「未来派・立体派」、前出)とまで書いていたのだが、だからといって、萩原がマリネッティやツアラの詩集を直接模倣したわけではないだろう。むしろ、私たちの国の言語表象の歴史上前例のないこの詩集によって、日本の先端的な詩がヨーロッパのアヴァンギャルドに追いついたと言えるのではないだろうか。

そのことを確認したうえで、詩集発行の一九二五年という年が、普通選挙法(五月五日公布)に先立って治安維持法が制定された年だったことを想起すれば、そこには大日本帝国という国家が政治家や活動家だけでなく、体制に少しでも批判的な作家や芸術家や哲学者たちをサディスティックに弾圧し続けた過去が浮びあがってくる。この法律にはこう規定されていた。(一九二八年には早くも改訂され、最高刑が死刑に引き上げられる。)

治安維持法

大正十四年四月二十三日、法律第四十六号

第一条 国体ヲ変革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知りテ之ニ加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処スノ前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

第二条 前項第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項ノ実行ニ関シ協議ヲ為シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

第三条 第一条第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項ノ実行ヲ煽動シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

第四条 第一条第一項ノ目的ヲ以テ騒擾、暴行其ノ他生命、身体又ハ財産ニ害ヲ加フヘキ犯罪ヲ煽動シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

第五条 第一条第一項及前三条ノ罪ヲ犯サシムルコトヲ目的トシテ金品其ノ他ノ財産上ノ利益ヲ供与シ又ハ其ノ申込若ハ約束ヲ為シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス情ヲ知りテ供与ヲ受ケ又ハ其ノ要求若ハ約束ヲ為シタル者亦同シ

第六条 前五条ノ罪ヲ犯シタル者自首シタルトキハ其ノ刑ヲ軽減又ハ免除ス

第七条 本法ハ何人ヲ問ワス本法施行区域外ニ於テ罪ヲ犯シタル者ニ亦之ヲ適用ス⁽⁸⁾

大正十四年二月十九日、この法律が第五十回帝国議会衆議院に政府提出された時の「議事速記録」によれば、当時の内務大臣若槻礼次郎は冒頭発言で「我国ニ於キマシテ、無政府主義者、共産主義者其他ノ運動ガ近年著シク發展スルヲ見ルニ至リマシタ」と述べて、「過激ナル運動」の最先頭にアナキスト（無政府主義者）を挙げてから、「過激ナル思想ヲ有スル者等ガ帝国ノ治安ヲ紊ルノ目的ヲ以テ不遜ナル行動ニ出ヅルノ傾向ハ益々増加スベキモノト認ムルノ外ナイノデアリマス」と続けていた。

アナキストへの言及は過大評価とも思えるほどだが、一九二二年七月に結成された日本共産党が翌年多数の幹部の逮捕で弱体化し一九二四年に解党したこともあり（二六年非合法下で再建）、共産主義者より無政府主義者が過激派の代表とみなされていたという状況があった。いずれにしても、この法律を根拠として、一九二八年二月二〇日には小林多喜二が特高警察の拷問によって築地警察署で惨殺されたこと、さらに一九四五年八月一日、太平洋戦争で日本国家が降伏した後でさえ法は執行され、九月二六日に哲学者の三木清（1897-1945）が豊玉刑務所で病死したと等々の事実が、私たちの集合的記憶から消えることはない。

こうした歴史をふりかえる時、『死刑宣告』をめぐる時、萩原と同時代の詩人でアナキズムに一時接近し『赤と黒』（第二次）にも参加した小野十三郎（1903-1996）が、一九五一年にこう書いていたことは示唆に富んでいる。

私はなぜか近頃しきりにこの萩原の詩集『死刑宣告』（一九二五年）のことが思い出されるのであります。〔…〕つまり政治と人間性の問題、政治と詩の問題の追究の仕方に、萩原の場合は非常に素朴に主情的なかたちで現われているのでありますが、「戦後間もない昭和二六年（一九五一年）の社会状況と」本質的に共通なものが感じられるからであります。『死刑宣告』一巻の評価は、今日大体、資本主義の重圧におしつぶされた小ブルジョワインテリゲンチヤが、労働階級との直接的な結びつきによる再生へと向わず、むしろ自ら孤立したままで没落を観念している「絶望の歌」であるというところに帰着している。しかしここに見られる断崖に追いつめられたものの実感と切迫した呼吸と韻律は、その当時においては一つの批評となつて、一応民衆の立場に立つということをひょうぼう（ママ）していた民衆詩人たちの詩的韻律の空虚さに働きかけたのであります。⁽¹⁰⁾

4 「断片49」(「マラテスタの部屋」)と小林多喜二の卒論

小野十三郎の言う「民衆詩人」とは『赤と黒』に参加した壺井繁治、岡本潤、川崎長太郎ら、あるいはもう少し範圍を拡げて中野重治らも含む表現かもしれないが、彼らの「空虚さ」が太平洋戦争直後の「現代詩」のそれと重なっているという小野の直観は二一世紀の今日なお再評価に値するといつてよい。けれども、萩原恭次郎は『死刑宣告』で強調されたような「絶望の歌」だけを書いていたわけではない。一九三二年(昭和六年)に出版された第二詩集『断片』には、作者自身が後記にあたる「メモ」で、「誰でも壁新聞のやうにポツリポツリ読んで休んでくれればうれしい」と記したとおり、各十数行程度の断章が五九編収められているが、そこには「天地が割れるやうな吼え聲を上げて鳴る汽車／それが我々の希望だ!」(「断片48」)とか「一切の死を乗り越へ一切の死に別れているわれわれである」(「断片52」)といった叙景的あるいはアフオリズム的な詩句が見出され、『死刑宣告』の絶叫とはあきらかに異なる言語表現が展開されている。

その中で、特徴的なのが「断片49」だ。というのも、この詩は萩原恭次郎が会ったこともないイタリアのアナキスト、エルリコ・マラテスタを題材にしている、日本の前衛詩人と世界的アナーキズム運動との関わりが実感されるからである。意味深い作品なので、全編を引用しておこう。

その部屋には机が一つあった

イーストロンドンの貧民窟の屋根裏である

昼はロンドンの街々を歩き廻ってレモン水売って生活しているマラテスタのため 机が一脚あるのだ

ロンドンの煙突と煤煙と汽笛が部屋の中をつまらせている

窓の側をあぶれの労働者がつぶれた鳥打を冠って通っている

マラテスタは夕食のパンを焼かずに食べている

イタリーの革命新聞のため毎夜白熱的論文を書いているのである

フランスの監獄から逃亡して来た身をこれからイタリーへ変装して潜入しようとしているのだ

マラテスタはいつ見ても同じ元気な顔をして

繰り返しの投獄

ギロチンに引き廻される宣告

××

そのどれが真先に自分をとらえるか

そのどれへもこれへも腹を据えて

明日 その渦中に身を没するマラテスタが屋根裏にペンを握っているのである⁽¹¹⁾

(「××」は治安維持法下の検閲による伏字で、初出では「暴動」。)

この詩篇の初出は一九二九年発行のアナキスト詩誌『第二』で、その第六号に「エルリコ・マラテスタの部屋」と題して掲載された。なお、一九三三年刊行のアナキスト系詩誌『弾道』(第二次)第三号には岡本潤の「マラテスタの死」が掲載されていた。イタリアのアナキストの運動家・思想家が没したのは上述のとおり一九三二年(七月二二日)だったからその翌年であり、当時のアナキストの国境を越えた連帯が実感される。

幸徳秋水や大杉栄が欧米のアナーキストたちと交流があり、大杉が一九二三年、関東大震災の直後に彼と妻と甥の三人を憲兵隊が虐殺した国家権力によるテロの数ヶ月前の五月一日（メーデー）に、パリ近郊サンドニの労働者集会でフランス語で演説して逮捕されことは、彼の『日本脱出記』（岩波文庫他）に書かれているとおりだ。したがって、萩原がアナーキズムの世界的な活動家マラテスタのロンドン亡命時代の生活に詩の題材を求めたことは、それほど唐突ではなかったかもしれない。当時の日本の前衛的芸術運動とその周辺のアクティヴな人びとの意識は、ある意味では今日以上に「国際的」で、『銅鑼』、『第二』、『学校』、『弾道』といったアナーキズムの雑誌には、バクーニン、トラー（土方定一訳）、マルチネ（尾崎喜八訳）、サンドバーク（草野心平訳）ら、同時代同傾向の西欧の作家・思想家が紹介されていた。⁽¹²⁾

それでは、ここで「マラテスタ」という、二世紀現在の日本ではあまり語られることのない人物と彼の思想を少しだけ紹介しておこう（一九二〇～三〇年代のアナーキズム運動が盛んだった時期には、自由聯合新聞などにマラテスタの社会評論が紹介されていた）。イタリアのアナーキスト、エルリコ・マラテスタ（Enrico Malatesta, 1853-1932）は、ナポリ大学の医学生時代にマツツイーニ率いる共和派のデモに参加し退学となり、その後パリ・コミューンに共感して社会運動に加わり国際労働者協会（第一インターナショナル）で活動、ロシアのアナーキスト、バクーニンの影響を受けイタリアを代表するアナーキストの一人となつて、過激派の新聞や雑誌に多くの評論を執筆したが、その後バクーニンから離れ、相互扶助論を唱えるクロボトキンと親交を結び国際アナーキズム運動に参加した。イタリアの王政に反抗したため生涯の多くの時間を外国への亡命と獄中で過ごしたが、一八八一年からは長年ロンドンを拠点に活動していたから、萩原の詩で描かれているロンドン生活はこの頃のことである。⁽¹³⁾

マラテスタは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、アナキストの国際大会で何度も発言していたので（一八九六年の第二インターナショナル・ロンドン大会で排除されたアナキストたちは、以後「黒色インターナショナル」を結成する）、彼の名は世界中のアナキストに知れ渡っていたから、日本の詩人がマラテスタを取り上げても不思議ではないが、萩原が一九二九年にこのような説得的な（語りかけるような）詩をアナキスト系の文芸誌『第二』第六号に掲載したことから、四年前の『死刑宣告』の詩人の今ではあまり語られない冷静な一面にあらためて気づくことができる。

「断片49」について、伊藤新吉は「国際的社会主义運動に奔走したマラテスタの姿に眼をそそいだこの詩は、一人の革命家の貧しい生活をとおして、非合法下の革命運動における強固な人間像と、崩れることのないその思想をとらえている。そこにアナキズム詩人としての萩原恭次郎の表情を読み取ることができる」と書いていた。¹⁴

ところで、マラテスタ自身の文章をこの機会に（英訳からではあるが）少しだけ紹介しておけば、一八九一年に発表された「アナキー」(Anarchy)と題する文字どおりアナキズム入門的なテクストで、彼は「アナキーとはギリシア語起源の単語で、文字通りの意味は『政府を持たない』ことであり、どんな政体も持たない人民全体の状態を指す」と一般的な定義を述べてから、こう強調していた（上述のとおり、マラテスタの文章はすでに一九三〇年代に邦訳されている）。とりあえず、英文から訳出すれば以下の通りである。

政府とは何だろうか。人間の心の中には形而上的傾向と呼ばれる病気が存在し、それが人間にある種の幻覚に服従させ、この幻覚が人間に抽象化されたものを現実だと思ひこませるのだ。この種の形而上的傾向は、実証科学によって打撃を受けたとはいえず、現代のわが同胞の大多数の心の中にまだ強く根を張っていて、大きな影響力を持つ

ているので、多くの人びとは政府が現実存在する実体 (an actual entity) だと思っ⁽¹⁵⁾ている。[…]

政府が裁判官であり、社会紛争の調停者であり、民衆の利益の公正な執行者だなどということは、嘘であり、幻想であり、ユートピアであり、これまで一度も実現しなかったし、これからもけっして実現できないのである。⁽¹⁵⁾

この文章で意外とも思えるのは、マラテスタが、無政府状態を理想化するアナキストの思想を「ユートピア」と断定する支配的通念を逆転させて、「政府」という存在のほうが「ユートピア」的なのだ⁽¹⁶⁾と鋭く指摘していることである。こうした立場から、マラテスタは「国家」(State)とは「政府」(Government)であるという社会通念を批判して、「もしそうなら、『国家の廃止』や『国家のない社会』といった表現は、アナキストたちが表明しようとして望んでいる、公的権力を土台とするあらゆる政治制度の破壊と、諸利益の調和と社会的欲求の充足への社会全員の自発的貢献にもとづく自由で平等な社会の建設という考え方と、完全に一致することだろう」と述べていた。⁽¹⁶⁾

ここで想い起されるのが小林多喜二(1903-1933)である。というのも、後に日本のプロレタリア文学を世界に代表する作家となる多喜二が、『死刑宣告』の前年、一九二四年一月に小樽高等商業学校に提出した卒業論文は「見捨てられた人とパンの征服及びそれに対する附言」と題され、イギリスの劇作家アルフレッド・スートロ (Alfred Sutro, 1863-1933 イギリスで最初の『青い鳥』の作家メーテルランクの翻訳者でもあった) の戯曲『見捨てられた人』(The Man on the Kerb, 1908)⁽¹⁷⁾とロシアのアナキスト、クロポトキン (Peter Kropotkin, 1842-1921) の『パンの略取』(The Conquest of Bread, 1892) (英語版第五章 Food) の邦訳と自序で構成されていたのであり、この日本のコミニズムの(政治的)前衛作家の若き日のアナキズムへの関心が表明されていたのである。⁽¹⁸⁾

さらに、表題の次の頁には巻頭言として、フランスのコミュニスト作家アンリ・バルビュス (Henri Barbusse, 1873-1935) が第一次大戦の従軍体験を描いた小説『クラルテ (Clarte)』から次の言葉が引用されている、小林多喜二個人というより当時のこの国の「前衛」的知識人の知識圏の拡がりが実感される。

神は存在しない……然し、否。此世にはたった一つの神が存在する。／人類がその生を正当に導くためには、この秩序を秩序であらしめるためには、／断じてそれから眼を外らしてはならない唯一の神が存在する。／それは「真理」と呼ぶ神である！⁽¹⁹⁾

そして、卒論の「自序」には次のように書かれていて、多喜二の思想形成の原点を知ることができる。

パンは確かに一般に行きわたるだけある。そしてあらゆる民衆はパンに対する権利をもっている。然し、ここに見捨てられた人のあるのは何故か？

こう云ったら、そこに何者かが居て、そのパンを壟断しつつあるものが居るから、と云う事が極めて容易に知ることを得るであらう！

その何者かを諸君はスウトロの戯曲のなかに見出すことが出来る。然しブルジョワは決して見出すことが出来ぬであらう。〔…〕

然し世のプロレタリアはその中であらゆる事実を発見するであろう。自分は、そういうプロレタリアーに限りない満足を感じる。そこで、自分はそういう民衆と次に進む。⁽²⁰⁾

一九〇三年二月一日生まれだから、当時二二歳になったばかりの青年の決意表明ともいえる文章で、九年後の悲惨な最期を知る私たちにとってはあまりにも感動的だが、卒業論文の最後に、彼はクロポトキンの言葉をこう訳出していた——「勇氣ある者は最初のものであり／勇氣ある行為は断じて失敗しないであろう」。⁽²¹⁾

この箇所は英語版は次の通りだ——“The bold thought first, and the bold deed will not fail to follow.” THE CONQUEST OF BREAD by P. Kropotkin, CHAPTER V (Food).⁽²²⁾

フランス革命の指導者で一七九四年にロベスピエールによって粛清されたダントン (Georges Danton, 1759-1794) の (英訳では) “Dare, dare, and yet again, dare!” というよく知られた命令文を引用した直後のこの箇所は、直訳すれば「大胆な (勇氣ある) 思想が最初になれば、大胆な (勇氣ある) 行動が必ずそれに続くだろう」となるから、多喜二訳は正確ではないが、「断じて失敗しないであろう」という表現のうちには社会正義に燃える若者の純粹な決意表明を読み取ることができる。

この「自序」のあとに多喜二による『見捨てられた人』全訳が続くのだが、この戯曲の舞台はロンドンの「ウェスト・エンドなる一家」で、「ジョーゼフ (ジョー)」と妻の「メアリー」が初めに交わすこんな会話から「見捨てられた人」の生活が見えてくる——「ジョー…流れの中に浮かんでいたパンを弁当にし、カフェー・ロイヤルの台所からくる匂いで食事をしただけだ。これが俺の一日なのだ。〔…〕俺は仕事が欲しくてたまらない、然し、世の中の人が俺に働かせないんだ。／メアリー…私たちはこんな不如意のために、もうすっかり貯えを喰いつぶしてしまったのよ。○ジョー、わたくしもう死にたくなっちゃったわ」。⁽²³⁾

ジョーとメアリーはまさに「そういう民衆」であり、多喜二の選択はすでに明らかなのだが、ここで「マラテスタ

の部屋」がやはりロンドン（「イーストロンドンの貧民窟」）だったことを思い出すなら、「アナ」派の萩原恭次郎とその後「ボル」派となる小林多喜二が、五年ほどの時差と政治的対立を隔てて、イギリスの首都の描写を共通項として「貧困」への憤りと社会変革への意志表示を表現していたことに気づかされる。とはいえ、高等商業の学生多喜二が一九二四年にすでに引用したバルビュスの作品の第二章（書名と同じ「クラルテ」）に「革命とは秩序である」と記されていたように、そこには「秩序」の党派であるコミニズムと、「秩序」より自由を重視するアナキズムとの「前衛」をめぐる埋められない亀裂がすでに見え隠れしていた。小林多喜二と萩原恭次郎に関しては、前者が政治的「前衛」、後者が文学的「前衛」への道を選んだといった図式的すぎるだろうか。

5 「前衛」の蹉跌と転向——無政府主義対共産主義

さて、これまで「前衛」という表現をやや不用意に使ってきたが、一九二〇年代～三〇年代の日本の詩人たちの社会・政治参加をめぐる避けて通れない大きな問題がある。もちろん「アナとボル」つまり「アナキスト（無政府主義者）」と「ボルシェヴィキ（共産主義者）」との深刻な対立のことだ。先ほど見た治安維持法制定議会での内務相発言にあったように、一九二〇年代（大正後期～昭和初期）の日本の社会運動では、最先端の「前衛」という意味では方向が重なる「アナ」と「ボル」は拮抗・対立しあっており、時代は遡るが二〇年代初頭までは、むしろ大逆事件で刑死した幸徳秋水や、やはり官憲に虐殺された大杉栄のような強烈な個性を擁する「アナ」のほうが目立っていたともいえるだろう。こうした歴史の実証的研究者小松隆二が『日本アナキズム運動史』（青木書店、一九七二年）で述べたように、公然党派としては一九二二年に結成されたばかりの共産党を拠点とするコミニズムに対して、アナキズムはすでに一九〇五年の日露戦争後から「紹介・模索の段階をぬけだし、運動のなかに一定の位置をしめる」

ようになっていた。⁽²⁴⁾

もっとも、大杉虐殺後は、モスクワのコミンテルンの強力な指導をつうじて「ボル」が「アナ」を押さえて勢力を拡大していったのであり、当時のプロレタリア文学運動は一九二七年のコミンテルン「二七年テーゼ」の発表から翌二八年のナツプ（日本無産者芸術団体協議会）や一九三一年のコップ（日本プロレタリア文化連盟）の結成にいたる展開の過程で諸派の離合集散を繰り返すことになる。本稿はそうした社会運動の歴史的過程をたどっているわけではないので、小松隆二の前出書から引用するにとどめたい。

少数運動から大衆運動へ転化する大震災後にいたると、抽象的な社会変革論や自由連合論だけでは、労働者を十分にひきつけることはできなくなった。そこにいたり、アナキズムの理論体系の脆弱性、とりわけ労働組合論の不備がいやおうなく露呈されることになった。その間隙に、労働運動を軽視ないしは無視する純正アナキズム（八太舟三ら、アナルコ・サンディカリズムを批判するグループ）が台頭する余地もあった。それによって、日本アナキズムはいよいよ混乱と窮地にたたされていく。そして急速に「アナ・ボル」対立時代は過去においやられ、「ボル」系の全盛期とそのなかでの左右の対立が舞台の中央におどりるのである。⁽²⁵⁾

というわけで、この時期のアナキズムの文化面での影響力に話を戻すと、当時「ボル」系で一九三〇年代に転向、一九四五年に共産党に再入党したが六〇年代に党から除名されるというジグザグコースをたどった詩人・批評家中野重治（1902-1979）は、太平洋戦争後にこう書いていた。

(…) 通俗的啓蒙的マルクス主義は文芸に対して力を持ちようがないため、ロシア十月革命の後までも日本の新しい詩について、当時『死刑宣告』前後の日本のマルクス主義は直接には無力であって、問題は無政府主義者たちの手にゆだねられていたと見られるふしが少なくない。厳密に云えば、アナキズムは修正主義、妥協主義とともに民衆の自己解放の道ではない。けれども、問題を詩にかぎって云えば、苦痛、憎悪、反抗の表現を、その真理についてのえせマルクス主義的手続きがあらかじめわかるまでは押さえておく、ひき延ばしておくすれば、そこに何の詩も生まれぬことは自明であろう。こういうものがマルクス主義として名をかかっている限り、反抗を詩に託そうとする人々は一そうアナキズムに走ることになる⁽²⁶⁾。

ここで、中野はアナキズムの詩が「反抗」の表現として人びとの心をとらえていたことを認めているが、「アナ・ボル」対立時代の一九二六年（大正一五年）には、同時代のアナキストたちを党派的な表現で批判した次の詩を、詩誌『驢馬』に発表していた。

無政府主義者

僕らはある重大な演説を聴いていた

僕らはみんな熱心に聴いていた

時々僕らは激しい拍手を送った

その時僕らのそばに

髪の毛の長い一団の男がいて

間違った言葉と卑しげな野次とを止めどなく飛ばした

それらの言葉は

どこか一種の政治家に似

ごろつきに似

またどこか縁日の商人に似ていた⁽²⁷⁾

そんな中野重治が萩原恭次郎と（おそらく）一度だけ出会ったことがあると伊藤新吉は回想している。中野が伊藤の生地（元総社村）の「代々神楽」を見に来た時だったという。貴重な証言なので、引用しておく。

一九三六年（昭和十一年）三月中旬のことだが、そのころ帰郷していた私が偶然の媒体になって、萩原恭次郎と中野重治が話しあったことがある。そのころになるとプロレタリア文学運動はとおい退潮していて、アナキズムとマルキシズムの対立ということも、しだいにその意味がちがっていた。そこには時代的な接点というべきものがあり、萩原恭次郎と中野重治の話しあいにしても、それは或る点を基底にした対立に変化していた。

〔…〕

根底に於いて、既成の文化を否定する意思が二人を結んでゐた。隔たるのはその方法、立場、文化的仕事に於いてであった。〔…〕

上半身を椅子の上でねち曲げながら、萩原氏は言った。

違ふ、違ふ、絶対に違ふ。さうじゃないんだ……

焦立たしい声だ。

——いや、さうなんだ。君の前でさう言ふのは困るが、然しさうなんだ。

——さうじゃない違ふ、違ふ……

二人の差異するところについて、互いに困惑しい焦立った応酬である。文化の傷口が、かうして二人の詩人を焦立たせることを、私は悲しく思った。「……」そのとき中野氏は、アナキズムの文学について見を述べたのであった。この二人の詩人が、かうして話しあったのはおそらくこれが最初であり、最後であった。寒風の吹きつける前橋駅で別れた二人は、もうそれきり逢うこともなかったに違いない。(萩原は二年半ほど後の一九三八年一月、三九歳で没)⁽²⁸⁾

この時、「ボル」の中野と「アナ」の萩原の間で具体的にどのような激論が交わされたのか、伊藤はふれていないが、萩原が一九二七年に雑誌『文芸解放』に発表した評論「アナキズム文学の一断面」で、彼らの文学が「アナキズム文学の文学的出発は、それ自身最も文学的事であること……」と書いていたことを思い出しておこう。小松隆二は、こう述べていた——「昭和初期は、一九二六年に『文芸戦線』での「ボル系」との共同戦線を、「政治主義文学」への批判からアナキストが放棄した直後でもあり、労働運動の後退に比して、アナキズム文化・文芸運動は表面的にはさかんであった。「……」その後には『文芸解放』『単騎』『黒旗は進む』『矛盾』『黒色戦線』『アナキズム文学』をはじめ、その他多くの機関紙が刊行された」（前出書、二二四頁）。

その後で「この過程で、萩原恭次郎はつぎのように、アナキストの文学観を主張している」として、萩原の「アナ

キーズム文学の一断面」を引用しているが、あまり正確ではないので『全集』（第三巻）から引いておこう。

アナキズム文学の宣揚は純粹なるアナキズム思潮の明確なる宣揚より初まる。「……」まず、アナキズム文学の文学的出發は、それ自身最も文学的であり得ることを、なによりも最先に宣揚しよう。更にブルジョア文学とボルセヴキ文学とに対して、真に人間の根本に立脚しようとする文学、就こうとする文学であることを宣揚しよう。

そもそも文学は大衆のものでなくてはならない。現在においては大衆のものでないけれ共——が、明確に文学は大衆のものである。けれ共、文学の製作は個人の文学的才能の高頂によって、發生せらるる以外の何物でもない。

〔…〕

我々は現在我々の文学の戰鬪的進行を高揚し展開せねばならない。アナキズムの本質にそして文学の本質としての戰鬪的文学を高揚せねばならない。²⁹⁾

当時唯一の前衛党を自負する共産党とコミンテルンが主導する文学をブルジョア文学と並べて批判し、「人間の根本」を称揚し、作家の「文学的才能」を最上位に置いて（前衛党にする）アナキズムの自立性を主張するこのような文章は、政治的「前衛」というよりまさに詩的アナキズムの意志表示だった。それ以後、一九三二年八月から二月にかけて、萩原恭次郎は謄写印刷の私家版雑誌『クロボトキンを中心にした芸術の研究』を前橋市外上石倉の自宅から発行し、「クロボトキンの芸術論に関するノート」「クロボトキンの芸術観に関する研究」などの評論をごく少数の仲間らにむけて発信したが、ロシア出身の偉大なアナキストへのこうした持続的関心は、やはりクロボトキンの相互扶助の思想に共鳴したイタリアのマラテスタへのそれと重なっていたともいえるだろう。

この時期の萩原は「政治（現実）と文学（希望）に自己の問題を提出した二つの詩誌『弾道』と『馬』」にかかわった後、独力で『クロボトキンを中心にした芸術の研究』（一九三三年）を自ら刊行して、もう一度アナキズムをクロボトキンの所論の底から見直そうとしたのであった、と推察できる」と、秋山清は回想している。³⁰

ところが、ここまでヒロイックな側面を強調しすぎた感がある萩原恭次郎だが、日本のアナキズム運動自体は一九三〇年代に入ると「無政府共産党」が武装闘争路線を取ったことが口実となって、政治運動としては、一九三五年十一月に全国のアナキスト数百人が一斉逮捕されるという事件によって事実上終息してしまう。

萩原恭次郎自身は一九二八年（昭和三年）秋に東京から前橋に戻ったこともあり、そうした弾圧からは距離を置いていたようだが、晩年には（といってもまだ三十代だが、三九歳で死んだので晩年にはちがいない）、無政府主義運動からも社会批判からも離反して、意外にも（という他はないが）体制賛美の方向へ踏みこんでしまう。かつての「アナ」や「ボル」が思想を捨てて権力側に就くか、あるいは沈黙することを「転向」というなら萩原を「転向者」と呼ばざるを得ないが、直接的間接的抑圧や拷問に耐えかねた「転向」もあれば、時代の空気に耐えられなくなった（ある程度）自発的な「転向」もあり、萩原の場合、（伊藤新吉の回想によれば）前橋で尾行くらいは付いたこともあったらしいが、逮捕も拷問も体験していないから、後者だったといえるかもしれない。

この点に関しても、死の直前まで本人と交流のあった秋山清は、上記の回想に続けて「その時から死まで六年間の恭次郎は東京の仲間との協力を欠かなかったが、何か従来なかった、社会及び人間についての考え方が内部成長したのかもしれない。まだ若い晩年の恭次郎について、従来いわれなかった解釈が私の内に、やがて生まれることを期待するものが必要にならない」と、意味深長な書き方をしているが、この「解釈」が萩原の「転向」をめぐるものであることは、秋山がさらに『『思想の科学』の転向研究会に伍して誰よりもやく、萩原恭次郎の戦時の思想的転向

を論じた私の立場からである」と述べていることから明らかである。⁽³¹⁾

一九三七年（昭和十二年）の日中戦争開始によって日本軍が中国大陸への侵略を開始した頃から、萩原の「転向」が目立つようになり、没年となった一九三八年に萩原は「北支方面」と「亜細亜に巨人あり」という二つの短い詩篇を発表している。昨今では『全集』以外には目にふれる機会が少ない作品であり、時代の証言として引用しておく。

北支方面（一部省略）

十字砲火を浴びねば戦争の実感が出ぬと、ある記者が通信をしてゐる。

戦争

国家は如何に大きな生き物であるか。

海上権を握った艦隊

揚子江の冷く沈黙した白い波頭を見よ。

〔…〕

今朝私は北支少年が日本語を習ってゐる写真を見た。

見よ 机にキチンと並んだ少年達はみな伸び上って手を上げ答へようとしているではないか。⁽³²⁾

大陸 北支の少年よ

日本語を学び給へ

そしてわれらと共に更に世界を学び給へ。

亜細亜に巨人あり〔全編引用〕

かつて神話の世界に住みたる太古の巨人は

今 亜細亜大陸の泥地に歴史の銚を羽として飛びゆく

巖石の扉あらばそれを開けん

大河あらばそれを渉らん

山嶽と森林の彼方民族の移動する行手に

血なき田畑は鳴動すれど

砕くべきものを砕き

建設すべきものを建設すべく

巨人はその大望を成就せん

今ぞ秋風寒き大別山山脈は声をひそめ、長江の波白くそよげど

祖業の指さす道を今日程ふかく知る日また無かるべし

東洋は新しき東洋たらんともがき

世界はその思想を激しくふるはせ

歴史はその倍の頁をつくりたり

われらこの新頁の一人として新世界をたがやさん

日本列島秋深く

紅葉と菊花盛り 塩の飛沫に濡れをれども

巨人は眦を決し鉾を握り民族の歩みを凝視む

山霧深きところ東洋の源（みなもと）に坐し

大御神の心もて凝視めて立てるを見よや。⁽³⁸⁾

一読すれば、実際に見たこともない中国の少年に「日本語を学び給へ」と迫る作者の立場は明らかだ。「亜細亜の巨人」とは、もちろん中国大陸を侵略する日本国家とその軍隊を神話化したイメージであり、「紅葉と菊花」や「大御神」なども『死刑宣告』の突出した詩的言語の先駆性が疑われてしまうほどだが、これらの表現がイソップの言葉というより、秋山も言うようにある種の思考の「内部成長」の結果であるとしたら、そこには萩原恭次郎の政治的「前衛」ばかりか、文学的「前衛」としての決定的な限界が見出されなければならず、その場合アナキズム詩人としての一貫性自体が問われることになるが、慎重な判断を要するこの問題についての考察は、とりあえずこのあたりまで

にしておこう。

時代は前後するが、ここで一九三二年に戻れば、萩原恭次郎が一九二七年に「アナキズム文学」が「ブルジョア文学とボルシェヴィキ文学とに対して、真に人間の根本に立脚しようとする文学に就こうとする文学であること」(「アナキズム文学の一断面」、前出)を主張したのとは対照的に、コミニストの戦間的活動家となった小林多喜二は、日本プロレタリア作家同盟の機関誌『プロレタリア文学』で次のように述べて、文学における「ボルシェヴィキ的党派性」の重要性を強調していた。

今程、文学理論をボルシェヴィキ的党派性を以って武装しなければならぬ事が要求される時はない。最近、我々の指導的立場にあるものが、ブルジョワ大衆文学に追随し、或いは我々の党派性確立の意義を抹消することによって、反動作家の「無理論」と協同し、敵階級に対して武装解除をなした如きは、嚴重に批判、追究されなければならない。⁽³⁴⁾

この攻撃的な宣言から一年足らず後の一九三三年二月二〇日、東京赤坂の路上で特高警察に逮捕された小林多喜二は築地署に連行され、数名の特高刑事の過酷な拷問を受けてもなお思想的「武装解除」に応じることなく、その夜のうちに無残な亡骸となるのだが、この時、もし仮に当時二九歳の若き作家が転んでいたら、数年後には、彼もまた彼自身の「亜細亜の巨人」を書いていたのだろうか？ あるいは、まったく逆の仮定を想定することも不可能ではない。もし仮に、日本革命が成功して「プロレタリア独裁」が成立するという、あり得ない事態が起こって、その渦中

に多喜二（現実の多喜二ではなくて「多喜二的精神」でもよい）が位置を占めることがあったとしたら、「多喜二」は（三〇年代スペイン内戦時に共和派内部でコミュニストがアナーキストにそうしたように）「反動作家」を「嚴重に批判、追究」する「前衛」として、被迫害者（*persecuté*）から迫害者（*persecuteur*）への変貌を遂げたりはしなかったと、はたして言い切れるだろうか？

萩原恭次郎の、やはり短かったが「前衛」をめぐるってまったく逆の終わり方をした人生との対比から、そんな不条理な問いが思い浮かんだのだが、もちろん正解があるわけではないから、その答えは私たち一人ひとりの生き方から探すほかはない。

そういえば、小林多喜二は一九二一年（大正一〇年）春、一七歳で小樽高等商業学校に入学するが、その半年前の一九二〇年秋、庁立小樽商業学校在学中の少年多喜二はこんな詩を書いていたのだった、まるで、無意識のうちに何かを予感していたかのように……。

運命のアイロニー

秋日さす障子の蠅

炉の天井に群がる蠅

残り短い命に

お前は無智の執着を

そして鈍かにも小さい反抗を

がお前は……………

冷たい霜夜

ふと落ちた蠅——本の上に

造作なく捕えた掌の中に

小さい——弱い羽搏き

「あゝお前も矢張り……………」

心寂しく放つ

が飛び得ないお前……………

短い夏の一生も

やがては秋の臨終

小さき残骸

かげろうの命をつかみ

熱と光によろめく

あゝされどお前は……………

(一九二〇・一〇)³⁵

6 少しだけブルトン、そしてセルジュ——結語に代えて

本稿は、ここで唐突に閉じられる。

というのも、このエッセーは当初、ベルギー出身の革命派作家ヴィクトル・セルジュ (Victor Serge, 1890-1947) の叙事詩的長編小説である『勝ち取った街 一九一九年ペトログラード』と『仮借なき時代』邦訳刊行をめぐって開催された討論のために用意した資料にもとづいて、セルジュとシュルレアリスムの詩人・思想家アンドレ・ブルトン (André Breton, 1896-1966) について、とりわけアナキズムとコミニズムの関わりをめぐって構成する予定だったのだが、その準備段階で出会った伊藤新吉の「詩的アナキズム」という意味深い表現に誘われて、萩原恭次郎から小林多喜二へと脱線してしまうことになったからである。つまり、ここまでが前書きで、ここから本論が始まるはずなのだが、時間的にも空間的にもその余裕がなくなったので、とりあえずこの辺で終わらせなくてはならない。

とはいえ、その前にセルジュとブルトンについて、それぞれひと言だけ記しておくことにしよう。

まず、セルジュだが、ブリュッセルの亡命ロシア人の家系に生まれたセルジュは、若き日にアナキストとして活動し、一九一〇〜二一年に起こったフランス最初の自動車と拳銃を用いた連続銀行襲撃事件の実行犯ボンノ一味 (Bande à Bonnot) とも交流があったが、一九一七年のロシア革命後まもなく、フランスとソ連の捕虜交換によって一九一九年にペトログラードに移動、社会主義政権下の社会の実態を目の当たりにして後年『勝ち取った街 一九一九年ペトログラード』を出版、革命とは火であり「古い人間を焼くこと 自分自身を焼くこと」だと書いていた。⁽³⁷⁾その後、第二次世界大戦末期のベルリンを舞台に『仮借なき時代』を執筆、そこでも「太陽を消す必要があるなら、太陽を消そうじゃないか!」と叫んだように、⁽³⁸⁾政治的「前衛」に深入りしながらも「詩的アナキズム」を実践した人

物だったと、少なくとも私は感じている。

ブルトンのほうは、もちろん二〇世紀最大の芸術運動シュルレアリスムの中心人物であり、一九二〇年にツアラのチュエリッヒからの到着を待つてパリ・ダダを開始、その後の曲折をへてツアラと離反し、一九二四年の『シュルレアリスム宣言』(『第一宣言』)、一九三〇年の『第二宣言』等で世界にその名を知られていることは言うまでもない。

そのブルトンをこの場に呼び出すのは、彼がたとえば『第一宣言』の最終段落で「私がめざしているシュルレアリスムは、われわれの絶対的非順応主義 (*non-conformisme absolu*) を宣言するものなので、現実世界を裁く法廷で(現実世界の)弁護側証人として喚問することなど、まったく問題にならないだろう」と書き、さらに時代をワーブして一九四二年の「シュルレアリスム第三宣言可否かについての序論」の冒頭で、「私の内面にはあまりにも多くの北 (*nord*) がありすぎて、何じとも完全に同意できるような人間にはなれないのだ」と断言していたからである。⁽³⁹⁾

さらに、三八歳になったブルトンが『秘法十七』(1924-1927)で、十七歳の頃を回想して「もう一つの戦争(第一次大戦)が迫っていた頃」、パリ近郊のプレ・サンジェルヴェで開かれた大衆集会(兵役を二年から三年に戻す一九一三年の法案に反対する労働組合の大集会)で、「数千の赤旗が翻るのを見た」体験を語りながら、赤旗の波を「数は少なく、場所も限られていたが、高く掲げられた黒旗 (*le drapeau noir*) が貫いた」のを目撃して胸の高鳴りを感じたと書いていたこと、そして、同じ書物の少し先で、もっと幼い頃、墓場で花崗岩に赤い大文字で NI DIEU NI MAITRE (「神も主人もなく」と刻まれた墓石を見つけた時の「高揚感と誇らしさ」(*l'exaltation et la fierté*)) を今なお記憶していると記していたことこそは、「詩的アナキズム」の原体験にほかならないだろう。⁽⁴¹⁾

ブルトンの「絶対的非順応主義」や「北」、そして少年期の黒旗や赤い大文字の墓石の体験がもたらしたアナキズム(というよりアナキー)への奥深い共感は、第二次大戦後も持続し、このシュルレアリスム運動最大の活動家

(アクティヴィスト)は *Libertaire* (絶対的自由思想家)、*L'Anarchie* などフランスのアナキズムの雑誌に寄稿していたが、一九五三年の重要な論集『野をひらく鍵』のわずか三頁ほどの短いテキスト「明るい塔」(LA CLAIRE TOUR)に、こう書いていたのだった。

シュルレアリスムがはじめてみずからを認識したのは(…)、アナキズムの暗い鏡の中だった。一九一四年の戦争の直後(一九一八年末以後)に、われわれが自分自身をそこから再び見出した高台、その結集力があらゆる試練に耐え得るものだったあの高地のひとつには、ローラン・タイヤードの『ソルネスのバラード』の以下のような結語も含まれていた。

ぼろぼろになったわれわれの心を打て

アナキーよ、おお松明の炎を運ぶものよ!

夜を追い払え! 虫けらどもを踏みつぶせ!

そしてたとえそれがわれわれの墓標としても、空にむかって

打ち寄せる浪を見おろす明るい塔を打ち立てよ!⁽⁴²⁾

さしあたり、これ以上語る言葉をもたないが、「詩的アナキズム」には、「党」ではなくて「塔」のイメージのほうがふさわしいとだけ言っておこう。

注（引用中の漢字は現代表記に改めたが、歴史的仮名遣いは原則としてそのままにしてある。本文とも〔 〕内は筆者の補足。）

- (1) 近年次の表題の文献が出版されている（著者はアメリカの研究者）。Uri Eisenzweig, *La poésie anarchiste au temps des attentats*, Christian Bourgois, 2001.
- (2) 伊藤新吉「覚え書」、『逆流の中の歌—詩的アナキズムの回想』、七曜社、一九六三年、二〇三頁。
- (3) 同上書、五二頁。
- (4) 伊藤新吉「詩書による日本詩史（大正編）」、『現代詩新講』、現代詩人会、宝文館、一九五一年、七七頁。
- (5) 萩原恭次郎「未来派・立体派」、『文章倶楽部』、昭和三年（一九二八年）二月、『萩原恭次郎全集』（第三卷）、静地社、一九八二年。なお、私自身二〇一三年にルーマニアのトリスタン・ツアラ文化文学協会の雑誌『ツアラ手帖』(Cahiers Tristan Tzara) に寄稿した批評「Dada au pays du soleil levant」（「日の昇る国のダダ」）で、『死刑宣告』を紹介したことがあった。
- (6) 秋山清「思い出 萩原恭次郎」、「萩原恭次郎ノート 1」、『萩原恭次郎全集』（第一卷）付録、静地社、一九七九年。
- (7) 『死刑宣言』特選 名著復刻全集 近代文学館『近代文学館発行、ほるぶ出版、一九七一年』、『萩原恭次郎全集』（第一卷、静地社、一九八〇年）。
- (8) 国立公文書館アジア歴史資料センターHP「アジア歴トピックス」から引用。
- (9) 同上資料。
- (10) 小野十三郎「詩書による日本詩史（昭和編）」、『現代詩新講』、現代詩人会、宝文館、一九五一年、八三頁。
- (11) 萩原恭次郎「断片49」、初版は渓文社刊。伊藤『逆流の中の歌』、前出、五四〜五五頁、『萩原恭次郎全集』（第一卷）、近代デジタルリブラリー「断片」参照。一九二九年の詩誌「第二」掲載の初出は上記全集に収録。
- (12) 伊藤新吉『逆流の中の歌』、前出、小松隆二『日本アナキズム運動史』（青木書店、一九七二年）、「アナキズム系詩誌」(webatio) 等参照。
- (13) 一九三〇年代前半には、エルリコ・マラテスタ（「エンリコ」と表記された）の「無政府主義とサンジカリズム」、「無政府主義への道」などの社会評論が労働者組合の連合組織自由聯合の新聞などに邦訳されていた。一九七六年には『無支配への道…エンリコ・マラテスタ著作集』が黒色戦線社から復刊されている。萩原恭次郎自身一九三三年の「クロボトキンの文学論に関する研究的序説」で「この国にも、バクニンやマラテスタを初め、今日ではクロ（クロボトキン）の全集も出版された」と書いている

『萩原恭次郎全集』(第三卷)、三〇七頁。「クロ全集」は東京春陽堂出版刊)。また、『萩原恭次郎全集』(第一卷、六一七頁)には以下の記述がある——「マラテスタ。E・マラテスタ。イタリア生まれ。一八七一年インターナショナルに加盟。バクーニンと結ぶがすぐ離れクロボトキンと結ぶ。アナキズムの組織者として中東・欧州・北米・南米と世界を駆けめぐる」。なお、マラテスタの著作が最近英語版で出版されており、このイタリアのアナキストへの関心が再び高まっているようだ——*At the Café: Conversations on Anarchism* by Errico Malatesta, Paul Nursey-Bray (Translator), Freedom Press, 2005.

(14) 伊藤『逆流の中の歌』前出、五五頁。

(15) Errico Malatesta, *Anarchy* (1891) Pamphlet first published in 1891. Marked up by Einde O, Callaghan for the Marxists, Internet Archive. あまり知られていない文章なので、英語訳で紹介しよう。

What is the government? There is a disease of the human mind, called the metaphysical tendency, that causes man, after he has by a logical process abstracted the quality from an object, to be subject to a kind of hallucination that makes him take the abstraction for the real thing. / The government – or the State, if you will – as judge, moderator of social strife, impartial administrator of the public interests, is a lie, an illusion, a Utopia, never realized and never realizable.

(16) 同上資料に於て。

(17) *Not*は「道路の縁石」だから「社会のいちばん端で生きる人、あと一歩で転落する人」の意。

(18) 以下、小林多喜二の小樽高商卒論は『定本 小林多喜二全集 第十二巻』(新日本出版社、一九六九年、八一―一三二頁)から引用。

(19) 小林多喜二が引用した『クラルテ』邦訳は、卒論提出の前年の一九三三年に叢文閣から刊行された小牧近江・佐々木孝丸訳である。

(20) 多喜二卒論、前出。

(21) 多喜二卒論、前出。

(22) Anarchy Archives (Website) : *The Conquest of Bread*, G. P. Putnam's Sons, New York and London, 1906.)

(23) 多喜二卒論、前出。

(24) 小松隆二『日本アナキズム運動史』(青木書店、一九七二年、二七頁)。著者は同書出版当時慶応義塾大学経済学部助教授で、奥

付の略歴によれば『幸徳秋水全集』『大杉栄全集』の編集にたずさわるとあるが、その後は教授から理事となつて大学経営に参加しており、同書以降アナキズム関連の著書は見当たらない。日本のアナキズム運動の歴史に関する戦後の資料としては、一九七九〜八二年に『日本無政府主義運動史』が大島・黒色戦線社版（本文は戦前のアナキスト大島栄三郎による復刻版）で出版されているが、小松の『日本アナキズム運動史』は、序文に「近年多くのアナキズム文献が公にされつつあるとはいへ、全般的にはその思想も、足跡も、すでにとりたてて意味のないものとして、片隅においやられているのが実状である。……」そのような思想史・運動史の空白を埋める努力は、自由思想の展開を解明するだけでなく、社会思想・労働運動・社会主義運動の全体像を正しく把握するためにもぜひ必要なことである」と記されているような問題意識から書かれているので、本稿で参照することにした。

- (25) 同上書、一七八〜一七九頁。
- (26) 中野重治『現代詩体系（昭和期）一』解説、河出書房（小野十三郎「詩書による日本詩史（昭和編）」、前出、八六〜八七頁）。
- (27) 中野重治「無政府主義者」（伊藤『逆流の中の歌』、前出、五五頁）。
- (28) 伊藤新吉『逆流の中の歌』、前出、五七〜五八頁。
- (29) 小松隆二『日本アナキズム運動史』、青木書店、一九七二年、二二四〜二二五頁。「アナキズム文学の一断面」、『文芸解放』（昭和二年四月）、『萩原恭次郎全集』（第三卷）、前出、六六〜六九頁（途中省略あり）。
- (30) 秋山清「思い出 萩原恭次郎」、「萩原恭次郎ノート 1」、「萩原恭次郎全集」（第一卷）付録、静地社、一九七九年。
- (31) 同上書。秋山清以上に萩原恭次郎と親しかったはずの伊藤新吉は『逆流の中の歌』（前出）で「転向」についてはひと言もふれていない。
- (32) 「北支方面」、『萩原恭次郎全集』（第一卷）、前出、五七〜五一八頁。
- (33) 「亜細亜に巨人あり」、同上書、五一九〜五二〇頁。
- (34) 小林多喜二「第五回大会を前にして」、日本プロレタリア作家同盟機関誌『プロレタリア文学』一九三二年四月号、『定本 小林多喜二全集』（第十二卷）、前出、十二頁。
- (35) 『定本 小林多喜二全集』（第十二卷）、前出、一三九頁（初出記載なし）。
- (36) 「ヴィクトル・セルジュを忘れない」（2014年4月19日東京のクラブ・ヒルサイドサロンで開催された角山元保氏と筆者のトークショー「ヴィクトル・セルジュと両大戦間ヨーロッパの政治／芸術」のための資料）。セルジュの二著『勝ち取った街』（Ville

conquise, Riaden, 1932) と『仮借なき時代』(Les Années sans pardon, Maspero, 1971) は、いずれも角山元保氏の名訳で現代企画室から出版されている(以下の引用は同訳書による)。

- (37) 『勝ち取った街』、角山元保訳、一六頁。
 (38) 『仮借なき時代』(上巻)、角山元保訳、二四頁。
 (39) Breton, *Manifeste du surréalisme*, 1924 (*Manifestes du surréalisme*, Folio, p.60).
 (40) Breton, *Prologomènes à un troisième manifeste du surréalisme ou non*, 1942 (*Ibid.*, p. 149).
 (41) Breton, *L'Arcane 17*, in *Oeuvres complètes*, III, *La Pléiade*, 1999, p.41-42.
 (42) Breton, *La Clé des champs*, in *Oeuvres complètes*, III, *La Pléiade*, 1999, p.935. 「明るい塔」邦訳は粟津則雄訳(『アンドレ・ブルトン集成・7』(人文書院、一九七一年)を一部参照した。「ソルネスのバラード」は『棟梁ソルネス』の作者イブセンの一九〇〇年の講演の際にアナーキズムの作家タイヤード(1854-1919)が執筆した詩篇で、ブルトンはその最後の部分を引用している(上記ブレイヤード版注記による)。「詩的アナーキズム」の感性が伝わってくる詩句なので、原文で引用しておきたい(同上書)。

Frappe nos cœurs en allés en lambeaux

Anarchie ! ô porteuse de flambeaux !

Chasse la nuit ! écrase la vermine !

Et dresse au ciel, fût-ce avec nos tombeaux,

La claire Tour qui sur les flots domine !